

3. 木製農耕具について

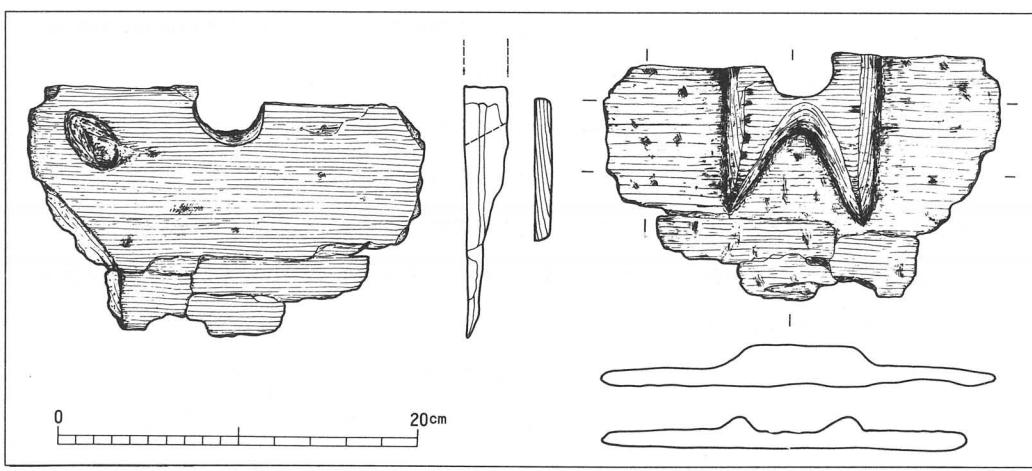
本調査において出土した農工具には、農耕具としての鋤 2 点（弥生時代中期 1 点、弥生時代中期末～5世紀中頃 1 点）と、鍬 2 点（弥生時代中期）及び、農具としての大足 1 点（平安時代）・工具としての斧柄 1 点（弥生時代中期）の 6 点がある。ここでは、農耕具の鋤と鍬についてさらに検討を加えてみたい。

（1）木製農耕具の出土例とその時期

宮城県内でこれまでに木製農工具が出土している遺跡は少なく、富沢水田遺跡以外には多賀城跡と小牛田町山前遺跡・仙台市今泉城跡が知られているだけである。

多賀城跡からは、奈良か平安時代の鋤（スコップ状）1 点が出土し（註 1）、山前遺跡からは、古墳時代前期の鋤 5 点（二又鋤 2 点・櫂状鋤 2 点、スコップ状鋤 1 点）及び平鍬の未製品かと思われるもの 1 点が出土している。（註 2）今泉城跡からは、室町時代末から江戸時代初期のスコップ状の鋤が出土している（註 3）。

また、富沢水田遺跡でも本調査以外に、高速鉄道関係昭和 57 年の泉崎前地区の調査で、第 87 図に示した農耕具が出土し（註 4）、さらに昭和 58 年の鳥居原地区の調査では、鋤状の農耕具が出土している。（註 5）泉崎前地区的ものは、上半部を欠損する丸鍬またはエブリと考えられるもので、片面の中央部には刃部に向けて二又に分かれた突起が造り出されている。時期としては、本調査の 8B 層または 9 層に対応する層より出土しているので、弥生時代中期と考えられる。鳥居原地区出土の鋤は、本調査出土の J-8（第 52 図 1）類似する形状を呈し、J-8



種別・器種	出土地・層位	残存長	全幅	刃部幅	刃部厚	突起長	突起幅	突起厚	柄孔径	柄角	木取り	時期
木製・鍬 (丸鍬)	12 層検出溝 上部	13.9	22.9	—	0.3 0.8	(9.5)	8.6	2.2	3.8	63°	柾目	弥生時代中期

第 87 図 高速鉄道関係遺跡調査－泉崎前地区－出土弥生時代木製品

より一回り大きなものである。時期としては、弥生時代中期以降奈良時代以前の年代が考えられている。

以上の木製農耕具がこれまで宮城県内で出土している全てであり、このなかで、弥生時代まで確実に溯るものは、泉崎地区から出土した、鋤1点と鍬3点の計4点の農耕具、これが現在までのところ宮城県内はもとより東北地方における最古の農耕具である。

(2) 木製農耕具の機能の検討

富沢水田遺跡からは、前述したように、鋤3点（本調査J-4・8の2点、高速鉄道鳥居原1点）と鍬3点（本調査J-6・7の2点、高速鉄道泉崎前1点）の木製農耕具が出土している。ここでは、これら6点の農耕具のうち、鋤J-4は他の資料よりやや新しいものであるが、これを含むそれぞれの形態の分類を行ない、そこから生ずる機能差による作業形態の差異について検討を行なう。農耕具は、同一用具か農耕作業用と土木作業用として使用された可能性は大きいが、ここでは農耕作業用として使用された場合についてのみ検討とする。

鋤は、いずれも長柄鋤と呼ばれるものでJ-4のように大型でスコップ状を呈するものと、J-8のように小型で櫂状を呈するものがある。大型のものは耕起および反転を行なうものと考えられるが、櫂状のものは効率からみて耕起用とは考えられず、何らかの限定された範囲を深く掘るのに適している。

鍬は、平面形態から分類すると、J-6・7は広鍬・高速鉄道泉崎前地区出土品は丸鍬に分類される。広鍬の2点は、広鍬としては良幅が狭く、柄角は約70°を計り、比較的鈍角に挿着されることから打ち鍬としての機が考えられ、作業形態としては土壤の反転や碎土作業に適している。なお、J-6とJ-7とでは、柄の挿着孔の位置に違いがあり、J-6は、身の中央部に位置し舟形突起も身の全長の割に大きく作られ、土中に深く打ち込むのに適しているが、J-7は、柄の挿入孔が、身の頭部に位置し、舟形突起も身の全長の割には短かく作られ、引き鍬としての機能も備えているようにも考えられる。（註6）

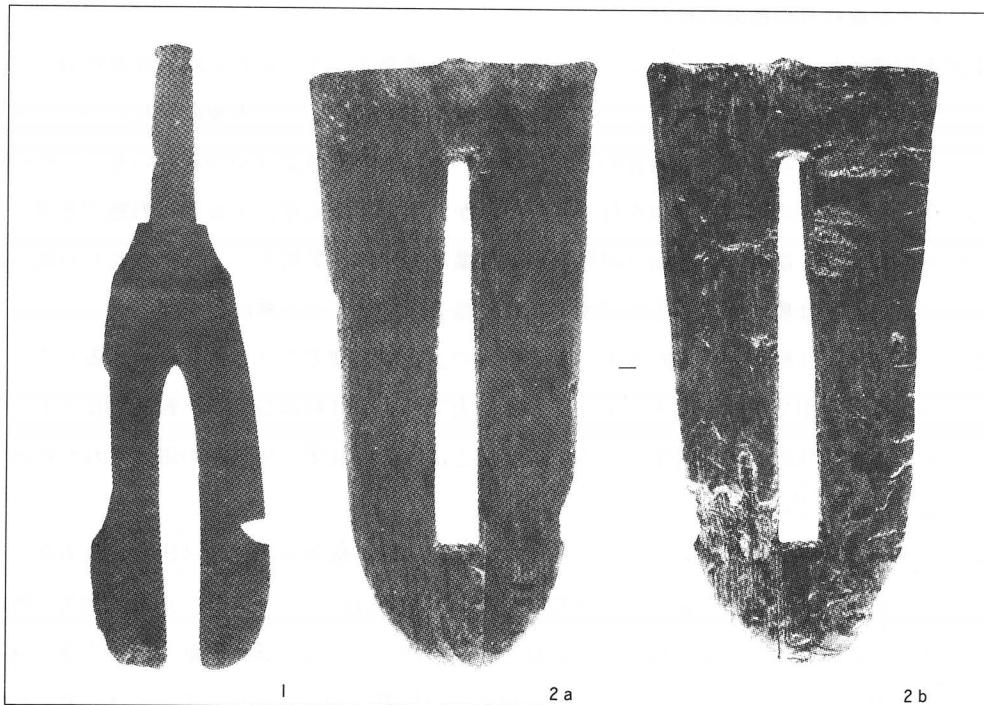
丸鍬は、柄の角度が約63°とやや鋭角になっており、また舟形突起も二又に分かれて、土中に打ち込んだ場合には抵抗が大きくなることから、引き鍬と考えられ、その作業形態としては、耕起または碎土した水田面の平坦化の作業が考えられる。なお、丸鍬は他の鍬や鋤が中軸の方向と木目の方向が同一であるのに対し、中軸と直交する方向で木取りされている。

(3) 木製農耕具の特徴と地域性

今回の調査で出土した農耕具を、他地域の製品と比較し、その特徴について検討する。まず、弥生時代中期の鋤・鍬についてみる。出土資料の点数がまだ少ないので、4点の資料では当地方の弥生時代中期の特徴を一般化することはできないが、4点のなかで特徴的なことは、鍬類の突起にあるように思われる。このような突起は、弥生時代中期頃まで一般的に存在し、九州

VII. 調査成果のまとめと考察

方面では円形・方形のものがより多く見られ、舟形のものにあっては、円形に近い形状を呈す。また、関西方面では円形または舟形のものが多く、舟形のものは九州方面ほどではないが円形に近いものや橢円形に近いものが多いようである。これに対し、本遺跡出土の2点の広鋤の舟形突起は、比較的細長いのが特徴となっており、九州方面のものに比べると唐古遺跡出土のものに、より近い印象を受ける。（註7）



挿図2 山前遺跡出土木製品（「山前遺跡」小牛田町教育委員会1976より転載）

次に鋤J-4の透孔についてみると、透孔の機能は、粘土が鋤から離れ易くするためと考えられるが、このような透孔を有するものは、山前遺跡の鋤に類例がある。（挿図2参照）J-4は柳葉状を呈し、山前遺跡のものは細長い台形を呈するという差はあるが、鋤身部の中軸線上に細長い透孔を穿つということは共通する。管見した西日本方面の資料のなかでは、これに類する鋤の類例が認められなかったことから推察すると、鋤に透孔を穿つのは弥生時代後期から古墳時代前期頃の当地方の特徴（地方性）である可能性がある。

今後資料の蓄積によっては、当地方における農耕具の地域性についても明らかになってゆくであろう。

註記

註1 宮城県多賀城跡調査研究所 「多賀城跡—昭和48年度発掘調査概報—」 1973

- 註 2 宮城県小牛田町教育委員会 「山前遺跡」 1976
- 註 3 佐藤 洋他 「今泉城跡」 『仙台市文化財調査報告書』第58集 仙台市教育委員会 1983
- 註 4 吉岡恭平 「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報II－泉崎前遺跡－」 『仙台市文化財調査報告書』第56集 P.33～45 1983
- 註 5 荒井 格 「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報III－鳥居原地区－」 『仙台市文化財調査報告書』第69集 1984
- 註 6 根本 修氏は、「木製農耕具の意義」（『考古学研究』22-4 P.93～116 1976）と題する研究において、本調査のJ-6・7のような鋤について、刃巾と着柄角度の関係から「打引鋤」として分類し、その機能としては「引鋤と打鋤の中間的性格」（P.102下）、「浅耕用の打鋤として、また一定の刃巾をもつことからして引鋤の代用として使用可能」（P.103下）としておられる。
- 註 7 末永雅雄他 「大和唐古弥生式遺跡の研究」 『京都帝国大学文学部考古学研究報告』 第16冊 1943